
仮面ライダーコア×仮面ライダーポセイドン前編 ポセイドン・コア復活編

k.i

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーコア×仮面ライダーポセイドン前編 ポセイドン・コア復活編

【Nコード】

N1770BA

【作者名】

k.i

【あらすじ】

ポセイドンが帰還し、コアを復活させる！ 新たな物語が始まる。果たして、仮面ライダーコアは『仮面ライダーの偏った記憶』から、『正しい仮面ライダーの記憶』を得られるのか？

(前書き)

スランプ脱出のために、書いてみました。ドバドバっを書いて、流れを取り戻します。

仮面ライダーコアを、ご存知だろうか。

彼（彼女？）は、『記憶の偏った仮面ライダー』として生まれた。

コアは、最期まで苦悩し、そして戦いに敗れ、死んだ。探していたのだ、仮面ライダーの真の意味を。わからずに、死んでしまった。

もしもコアが生き返ったら、その目に何を見るのだろうか？ 生き返らせることは出来るのだろうか？

これは、無念の死を遂げた仮面ライダーが、帰ってきた男の助けを借りて、再生する物語である。

☆☆☆

宇宙。

それは神秘と浪漫に溢れる、別世界。だが、宇宙に行くのは困難なこと。ある程度自由に行けるようになった今でさえ、多数のデブリ（宇宙ゴミ）を出し続けなければならない。

地球を徘徊するデブリ。その中には、大きいものもあれば、とてつもなく小さいものもある。

では、今浮かんでいるあの、金と青、もしくは赤で彩られた円形の物体は、どちらに属するのだろうか。だが、地球にひときわ近く、周りのゴミがないため認知しづらい。

それは、メダルだった。明らかに、宇宙に持っていくようなものではない。誰が、いかなる用途で持ち出したのか。

メダルには、青がサメ、クジラ。赤が、何かのサカナが描かれている。それは、オオカミウオという、知名度が低いものだ。

このメダルは、無重力で、真っ暗な空間に放り出されている。

だが。

いきなり、三枚のメダルは地球側に向かって動き出した。近いということは、重力が作用しやすい。そのため、青く、美しい地球は、否応なしにメダルたちを吸い込むこととなった……。

……メダルは、生きているに等しい反応を起こす、いや、思考を起こしていたが。

☆☆☆

くそっ、アイツらめ……。

俺は毒づいた。

地球の外にまで飛び出したのには、理由がある。ある男たちに倒されたからだ。戦うために動き出した俺は、奴らにやられた。そして、メダルにまで細かく分解され、こんな宇宙にまで来てしまった。

しかし、幸運なことに、重力は、再び大地に導いてくれた。

地に降り立ったら、次は何をしようか。考えてみた。

まず、俺を倒した二人――湊ミハルと、火野映司（ひの えいじ）と再戦する。今度こそ勝つんだ。奴らに。この広い地球、会うことはかなり難しい。特にミハルの方。だが、必ず倒してみせる。

そうこうする内に、燃えつつ、空にまで来た。遥か下には、海岸にいる二人の白服と、一人の女が見える。メダルのこのままでは、動けない。どちらかに憑依するべきだろうか……？

すると、白服の片方が、自分の手に銀色のメダルを持った。そこまでは見る、というより目がないから感じる、だが、わかる。アレは、セルメダルだ！

セルメダルは、身体を構成していた物質の一つだ。無論ここまで来ればわかるが、俺は人間じゃない。だから攻撃対象になったんだが。

もう、普通に全ての行動がわかる辺りにまで近づいた。白服は自分の額にメダルを投入。腹から、甲冑の怪人が二体出て来た。あれはヤミー。構成物質セルメダルだけで出来た、怪物だ。俺の身体を作るのにも利用される。

一体は挟み込むタイプの角、もう一体は突き刺すあるいは投げられるタイプの角。どちらも俺の獲物だ。手に入れば、身体を得られる。

俺は、二体中、挟む方（クワガタヤミー）の奴と接触した。

「!？」

同時に、視界が開け、腕にまで意識が伸びるのを感じる。白服が驚愕しているのが良くわかる。

それもそのはず、さっきまでヤミーだったのは、一人の男に変わっていたんだからな。

腕、ふとももを見る。完全に人間だ。青を基調とした服を着ている。目の前に入った前髪は、一部が青かった。

この姿は、湊ミハルのサルマネだ。このくらいは楽に出来る。

「何者だ、キサマ！」

白服が、高い声を上げる。多分、いつもはこれより一オクターブ低いに違いない。俺はにやりと笑った。復活成功だ。これから存分に暴れてやる。

「この姿は湊ミハルってんだ。よろしくな。それで、本当の姿は――」

背後にいる女を見る。若い。俺の感覚では、十代後半、ってトコだと思う。

白服の前で、太陽みたいなバックルをチラチラと見せた。光が伸びているようで、内側は円形にぼっかりと黒くなっている。そこには、メダルが三つセット出来るだけの窪みがあった。

コレも、以前使っていたツールのサルマネ。だが、使うならこれで充分だ。

「――仮面ライダーポセイドンだ」

カシャツ カシャツ カシャツ

俺、つまり本体のメダル。サメ、クジラ、オオカミウオの『コアメダル』をセツトする。こいつが俺の力の源だ。

そしてバックルを腹に付けると、ベルトが伸びて、俺の腰に巻きついた。

「変身」

つぶやくと同時に、変なオッサンの声……変身音が鳴った。スキヤンしたメダルの種類を叫ぶドライバー！。

仮面ライダー。それは、どっかにいるヒーローの名前らしい。俺の名はそこからとって、ポセイドン。実際の行動は全然それらしくないが、気にしたことはない。

変身するエネルギーが、メダルから出て来て、さらに巨大なコアメダル状になって乱舞する。俺から見て右側、相手から見て左側。そこに、鋭い形の魚が身体を巻いているのを横から見たものが描かれているメダルが見える。

《サメ！》

オッサンの声の変身音。そして、逆側には、背中から水を出している魚のメダル。

《クジラ！！》

ここまでは青かったが、逆三角形を描くように見えたメダルは、赤い。それは、でっぷりとした正面の顔。

《オオカミウオ!!!》

声のトーンが上がる。三枚のメダルのエフェクトが重なり、俺に当たった。そしてそれは俺の身体を包み、姿を変えていく。

まばたきしてもう一度見たとき、俺の姿は、全くの別物になっていた。

海岸に微かに映った影から、自分の姿を読み取る。

頭は、水色のサメが後ろを向いている———というか、泳いでいるもの。黄色い複眼もおぼろげに見える。胸には、今の三種の絵が。背景は黒い。さらに、肩などには、クジラが、自分側から見て右側、相手からだとも左側を向いているのが。そして、足は、赤い線が一直線に走り、足の装甲にまで続いているのが見えた。これがオオカミウオのメダルによる変異だろう。

「ナニイ、仮面ライダーポセイドンだと！ 我ら財団Xの情報では、すでにいないと……!!!」

白服（財団X）がうめいている。まあ、やられたと思ってた奴が復活したら驚くわな。

「その通り。だが、また地球に戻ってきた。」

「くっ、やれ、カブトヤミー」

「抵抗するのも良いが、命乞いだけはするな。時間の無駄だからな」

俺——仮面ライダーポセイドンは、現れた赤い矛を振った。これは変身すると出て来るものだ。もちろん、俺ならば任意で取り出せる。

振ると、エネルギー波が生じ、それに当たった『カブトヤミー』は吹っ飛んだ。同時に、メダルに分解される。ヤミーが倒されると、セルメダルに還元されてしまうのだ。

「くそっ！」

白服の一人が、拳銃を持ち、撃った。

パン

その音は、意外に軽かった。金属が弾を打ち出すのだから、その程度のものなのかもしれない。当たっても気にするほどじゃない。実際の威力も俺にとっては軽いから。

「うっ」

しかし、気にすることになった。背後から、人間の苦しげな声が聞こえた。それはつまり、人に当たった、ということの意味する。

その方を向くと、女は倒れた。黒い服に赤いスカート。そのため、出血してもわかりづらい。恐らく腹だと考えられる。

ちっ、ったく、あいつらもコントロールが悪い。もう少し上手く

当てろっての。関係ないのにもやっちゃっただろう。

逃げていく白服どもを身ながら毒づく。そして、女を見た。髪は長い。地に、それらが広がっている。放っておくか？ そんな楽な選択肢を思い立った。

が。

「！」

何か、別の気配を感じる。人間じゃない。俺と同じ、コアメダルだ。ただし、壊れかけた中古の粗大ゴミのような気配。

任意で、変身は解除出来る。湊ミハルのサルマネ姿に戻った俺は、海辺を見渡した。どこにいる？ 近いぞ。

とある看板の下に、それはあった。

『風都をキレイに、ゴミをなくそう！』

そんなキャッチコピーだ。手を突っ込むと、パシヤリという水の弾ける音と共に、緑色の棒みたいなものと、俺と同じ三枚の黒いメダルが救い上げられた。メダルはわかるが、この棒は何だ？ 『M』という字の上ら辺には、『MEMORY』と書かれている。

また、コアメダル。それには、針を尻につけている奇怪な動物や、カニ、エビが描かれている。海の動物であるカニとエビは、自身が『サメ・クジラ・オオカミウオ』なのでわかるが、最初のものが良くわからなかった。

しかし、メダルはどれも割れており、今は運良く絵柄が認知出来る程度。しかも、二つや三つに割れており、パズルのように組み合わせ、何のメダルかがわかる。これは、再生は無理だろうな。

「うう……」

うめき声で、また我に帰る。女がまだいた。

……ん？

ふっと、ある名案が頭に浮かんた。そうだ、この割れたメダルを、あいつに投入すれば、もしかすると、メダルが再生、あの女も治るかもしれない。メダルが元に戻れば、一人仲間が増えるのだ。

駆け寄り、メダルを額に投入。セルではないので、ヤミーみたいなことにはならない。少しばかり身体を借りておこう。それに、セルなら、当分はさっきのヤミー分で足りる。

「さて、と」

後は、この棒（メモリ？）をどうするかだ。使えるのか、使えないのか、はつきりしない。一体何の用途に？

処分に迷っていると、突如、そのメモリが飛び、女の身体の中に、コアメダルと共に沈んだ。なっ、そんなことになるなんて聞いてないぞ！？

予想外の出来事に驚いていると、女はいきなりガバツと起き上がった。出血はもう止まっているようだ。跡形すら残していない。さすがコアメダル。治癒力が強い。

女はいきなり立ち上がると、俺に話しかけてきた。

「我は何故今ここにいる？」

???

大量の疑問符が頭をよぎった。コイツは、本体の女か？ それとも、コアメダルの意識か？ もう復活していたとも考えられる。いや、あのメモリのせいなのだろうか。

「少し聞くんが、お前の名は？」

「我が名は仮面ライダーコア」

さらにわからなくなった。

「お前は尻毒針・カニ・エビのグリードなのか？ ちなみに俺は仮面ライダーポセイドン。サメ・クジラ・オオカミウオのグリードだ」

グリードとは、俺みたいなメダルの怪物のことだ。

「……………？ 我が名は仮面ライダーコア。それだけだ」

……………。

もっと、意味が、わからなく、なった。

少し状況を整理して、真剣に考えてみよう。こいつは、自分が仮面ライダーコア、ってのは知ってるが、自分が何で出来てるかは知

らない。だから、あの女の本体である可能性は消えたが、メモリ・メダルのどっちなのかはわからない、と。いや、どちらも、つても考えられるが。

まあいいや。

結局、思考を放棄することになった俺は、女の名前を確認しておこうと、黒服の胸ポケットをまさぐった。

「……いきなり何をする」

不審そうな目で訪ねてくるコア。うるさいな、名前の確認だつてのに。

あった。これに名前が書いてあると今後の展開の整理に役立つんだがな。

写真が見えた。次いで、名前も見えた。ラッキーだった。この人間の扱い方が良くわからない今、どこに送るべきかは知っておく必要がある。

『火野翔子^{ひのしょうこ}』

火野。

まさか、俺を倒した、火野映司の家族か！？ 何という因果だろうか。こいつが俺に関係してる人間かもしれないとは。

『園咲学園高校』

そうも書かれていた。よし、じゃあ園咲学園に行かせりやあ良いんだな。

「よし、おめえは火野翔子って名乗れ」

「何をいきなり」

「あと、園咲学園に行け」

「何をいきなり」

ラチがあかない。

仕方がないから、ムリやり連れて行くことにした。テキストに連れ回すよりは、場所を特定させといた方が楽だ。手下、もとい仲間をゲットするためには、このくらいやるさ！

(後書き)

次回も書けると良いのですが……。よろしくお願いします。
M
O
V
I
E
大戦のネタのためにも、たくさん書いておきたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1770ba/>

仮面ライダーコア×仮面ライダーポセイドン前編 ポセイドン・コア復活編

2012年1月4日14時47分発行